

指導教授推薦文

論文等テーマ ビジネスにおける女性活用の方法と課題

著 者 名 染谷 真己子

今回の染谷君の論文「ビジネスにおける女性の活用方法と課題」は現在における企業の女性のキャリアによる育成問題を取り扱ったものである。これを日本よりも進んでいるといわれているアメリカ企業の女性の昇進問題を取り扱い、日本企業の最近の問題と課題を究明することに重心がある。

アメリカでも女性がある年齢になれば家庭に入り、常識的に家族のために生きるという点で日本の社会とアメリカの社会に酷似した考え方がある。すなわち、女性の幸せは家庭に入ることとしている点にあった。

そして、第二次大戦時の男性の労働力不足は日本も敵対国でありながら同じような状況になっていた。しかし、日本の敗戦とアメリカの勝利という結果にもかかわらず、時間を経るに従って相違点を生んでいった。その後の展開はかなりの違いを見せ、アメリカではジョーン・バエーズに代表されるような女性解放に向かうのに対して、1970年代に日本はもとの状態に戻っていったように家庭に入るといった考えに戻っていたが、逆に女性の高学歴化が進むに連れて活躍の場が広がっていったのである。

しかも、人口の減少は日本ではより深刻であり、移民政策もうまくいっていない。恐らく、人口減少による企業従業員のスキルの劣化に対する方法として、定年制の延長、女性に本格的な活動の場を与えるといった方策に移行してきているように考えられる。

男女雇用平等法の成立にもかかわらず、漸く最近になって日本でも本格的な女性の活動の場の時代に入って来たといっても過言ではないであろう。

このような女性の活動の場と制度的な整備について事例研究を進めているのが今回の染谷君の論文である。ここで問題点を指摘すれば、どのような企業で実際的に適応し、その企業のおかれている環境を考えることである。最近のビジネス世界における女性活用問題への注目はますます高まっており、今後のさらなる研究の深化を期待したい。

2006年11月21日

推薦者（指導教授） 武 内 成

論文等テーマ 中国朝鮮族の民族語に対する言語意識からみるアイデンティ
ティの考察—延辺大学における質問表調査を通して

著 者 名 趙 南実

本論文は、中国朝鮮族のアイデンティティを、民族語に対する言語意識を通して考察したものである。つまり、朝鮮語を母語とし、日本語を専攻する中国朝鮮族出身の延辺大学生に対し質問表調査を実施し、中国朝鮮族における以下三点の仮説検証を試みた。仮説1：朝鮮語の機能低下あるいは朝鮮語の使用範囲の縮小化が進行している。仮説2：朝鮮語に対する継承、発展意識は依然と高い水準にある。仮説3：延辺の若者には「中国朝鮮族」というアイデンティティが強く存在する。修士論文調査では、これらの仮説に対する有意な結果は得られなかった。しかし、朝鮮族若者の意識構造に関しては、不十分ながらその状況が把握できた。つまり、朝鮮族はあくまでも中国の少数民族であり、漢民族とは異質であると意識している（文化、言語、生活習慣、家庭教育、待遇政策、考え方など）。しかし、祖先、学校教育、宗教、雰囲気などについては強い民族意識が見られなかった。つまり中国朝鮮族にあっては朝鮮民族としての文化的背景の独自性が薄れつつあると解釈できる。

本論文は、修士論文をまとめたもので、問題意識、文献の引用、論文の構成が適切かつ、適切で、日本語の記述・論述も明確である。しかし、論文審査時に指摘された不備な点（理論的枠組みの構築、調査法、分析手法の各所における不備な点など）が全く改良・改訂されていない点は、甚だ遺憾である。しかしながら、『大学院論文集』への投稿論文としては適切であると考え。よって、今後の研鑽に期待しつつ推薦する。

2006年10月20日

推薦者（指導教授） 熊 谷 文 枝

論文等テーマ 言語行為論による語気助詞の分析方法—『吧ba』を例として—

著 者 名 蔣 家義

蔣家義君の修士論文は「ダロウと『吧ba』の対照研究—言語行為論の立場から—」（2006年9月）と題するものであったが、これは日本語のダロウと中国語の「吧ba」の対照研究における先行研究での意味論的側面重視という不備を打開するために、言語行為論の立場から新たな分析法を開発しつつ両形式について分析・考察を進めたものであった。日本語に11種類の「ダロウ」を、中国語に15種類の「吧ba」を認め、それぞれの発話意味と発語内効力（6要素）を明らかにし、両形式の異同を論じた。

今回のこの論文では、修士論文で開発した「ダロウ」と「吧ba」の言語行為論的分析法を、中国語の語気助詞そのものの意味の新たな分析法、記述法へと発展させることを試みている。語気助詞の意味はとらえどころがないとまで言われることがあり、また、研究者によって分析法が異なっており、現在はより確かな分析・記述法の開発が望まれている。このような状況にあって本研究の意義はまことに大きいものと考えられる。

この研究で提唱されている方法のメリットについては論文の「5.まとめ」に述べられているので、ご参照いただければ幸いである。

なお、修士論文で15種類に設定した「吧ba」を本論文では13種類に設定しているが、これは紙幅の関係で、それほど使用度数の高くない2種類を割愛したためである。本論文の目的が「吧ba」の分類ではないということもある。

以上、日本語との対照研究を通じて言語行為論的基盤の上に生み出された分析・記述方法が中国語の語気助詞の意味の分析と記述の方法を一步前進させることに寄与しているものと信じ、ここに推薦する次第である。

2006年11月16日

推薦者（指導教授） 今 泉 喜 一

論文等テーマ 「上」と「下」のメタファーについて—日中対照研究—

著 者 名 左 咏梅

この論文は来春修了予定の修士論文を元にしたものです。

日本語と中国語の上下のイメージスキーマを元にして、レイコフの認知意味論の理論を適用して日本と中国における意味の拡張について研究したものです。

日本語の例文と中国語の例文を多数集めて、各々の上下イメージから、どのような表現が可能になったか、また、両者の拡張の形の異なりから、どのような両言語のちがいがあるか、文化的な意識が異なるかを明らかにしました。

同時に、両者の共通性も示し、理解可能な部分と理解の困難な部分を示し、両言語学習者にとっての益になると思われます。

時間的な事情により、今回提出することになりましたが、その完成度は、十分に論文集に採録される価値があると思います。

2006年11月21日

推薦者（指導教授） 金田一 秀 穂